

第十一節 食糧事情

戦後の世相について赤地信氏は「知名町誌」で次のように述べている。

敗戦苦の波は、本土から我が大島郡にも押し寄せ、日を追うてひしひしと迫ってきた。食糧不足・衣類の不足・戦災による住家復旧・引き揚げ者の問題、次から次へとかつて経験しない難題が襲い、物資不足とインフレから来る闇取り引きは裏から裏を潜って横行し、あらゆる物の値段は今まで想像だにできなかった馬鹿値段に上昇し、持てる者はこの世を我が世と思うほどの富をほしいままにし、持たざる者、馬鹿正直者はそれこそ四苦八苦して一日一日の命をつなぐにきゆうきゆうとしている現状である。当時の物価を示せば次のとおりである。

粃おみ一俵は昭和十八年には十二円であったのが、二十年には五、六十円から百円・二百円と昇り、次に五百、八百、千円と騰貴し、二十一年・二十二年の五、六月ごろ

には三千円に売ったと豪語する者さえ出てきた。

砂糖は終戦となるや、一斤五十銭、一円、三円、五円、十円と上昇し、二十一年八月ごろは最高騰に達して一斤五十円、一樽六千五百円にまで上がった。二十三年九月の通り相場は一斤二十円。

牛肉は、一斤四十円〜五十円。

豚肉は、一斤八十円〜九十円（粃六升ないし七升と交換

換

子牛（牝）、五、六千円から八千円台。

子豚は粃一俵。煙草は一斤七、八十円〜百円。

焼酎は一升百円〜二百円。卵は一個二円〜二円五十銭。すべての物価がこのような調子で、経済界は景気がよいと言いか、混乱というか、正常でなかった。

したがって人夫賃、大工賃も高騰して金銭よりも米を要求するようになった。人夫賃一日米一升、大工賃一日米二升、石工賃一日米三升。（これはいずれもまかなわれてのことである）

消費者には町から管理米の配給があるが、その量は二階から目薬で、まったくお話にならない。さらに消費者に対しては、アメリカの放出食料（メリケン粉・グリーン

ピース・缶詰類）の配給があるが、そのみに頼って生活できる量ではない。衣類はすべてアメリカのストック品の配給で、世帯主、男女、長幼別に点数制の配給を行っていたが、配給といえは食糧・衣類、いずれも物のいかに問わず競つてとる状態で、貧困な者は衣類を闇で流して食糧を求める者もいた。区長会の都度アメリカ配給品が渡り、それをもらって喜び合う態は、情けない日本人だと心の底でつぶやくのであったが致し方はなかった。メリケン粉の配給品で手打ちうどん作りを手伝ったことも、文数の大きい靴の配給を受けて我慢してはくより仕様がなかったことも、ラシヤの洋服地の配給で飛びあがって喜んだことも思い出される。その手縫い洋服は今でも持っている。

心身ともにつかれ切った時代に教育は特に重点的に扱わねばならぬときであったが、背に腹はかえられぬので転職のやむなきに至った教育者も出た。ヤミ取り引き密航船は当時の流行語であった。教職員は出身地以外に転勤でもしようものなら食ってはいけなかった。米が一升百二十円で、校長の給料は三百五十円が高い方で、米三升も買えなかった。焼酎は皆自家製のものであり、原

料にはソテツの実を用いたのが多かった。

農作物の植え付け時期である昭和二十年三月一日から終戦の八月にかけての空襲によって農作業が思うようにならなかったことと、引き揚げ者が多く本島の人口が約二倍になったうえ、また昭和二十一年二月二日に奄美群島は日本本土より行政的に分離され米軍政下に置かれたため、本土からの食糧品や生活必需品も入らず、我が沖永良部島民は引き続き食糧難になやまされた。米軍から小麦粉・Kレーション（携帯食）・アスパラガス・ハッシー（肉と野菜のごった煮）・ベーコン等の配給はあったがそれは微々たるものであった。名瀬市に比べて農村には食糧の配給が少なかった。沖永良部島民は自給自足を余儀なくされ、からいもを主食として、ソテツの実や幹、海藻などを食べて生活した。

昭和二十二年から主として小麦粉が配給され、各家庭では「うどん」を作って腹の足しにした。生産面では米・麦・甘藷・粟・タビオカ・豆類などの主食の増産に力が入れられ、さとうきびはやはり二次的なものになっていた。また冬野菜類は豊富に作られたが夏野菜は不足して

いた。

焼酎は昭和十九年徳之島の飛行場建設のため徴用された人たちがその製法を覚えて帰り、各家庭でつくるようになった。原料は米・麦・粟・からいも・ソテツの実などが主であった。

煙草は沖永良部島と与論島は戦前・戦後を通じて専売制が布かれていなかったもので、戦前から作られていた。終戦後は各家庭で作るようになり、品質が非常に良くてエラブ煙草の名声は高く、換金作物の一つであった。簡単な方法で巻煙草が作られたが巻煙草に使われる美濃白紙が全々手に入らず、巻煙草には辞典の紙がよく使われた。

製塩は沖永良部島の各地で行われており、特に稲作をしていない人たちは米と物々交換するため盛んに作っていた。

昭和二十五年加州米が配給されるころには沖永良部島の食糧事情も良くなってきた。